

シニアコラムらしく、「昔々」という出だして始めよう。昔々、ある一時代、プレゼンテーションで使う道具はOHP (Overhead projector) だった。国際会議で出張する際も、OHP シートと OHP 用カラーペンが必携品だった(けっこうずっしりと重くなったものだ)。

OHP でプレゼンテーションが行われていた頃は、それぞれのプレゼンテーションに個性があふれていた。絵の上手下手の違いは別にして、それぞれの発表者がそれぞれに何らかの工夫を凝らした手描きのシートを作っていた。Donald E. Knuth の招待講演を聴いたことがあるのだが、壇上にあらわれた Knuth 先生は、OHP の上に何も書かれていないシートを1枚載せて、いきなり手書きで問題を書き始めた。図式化するわけでもなく、基本的に数式だけを並べていくのだが、論理の組み立てと説明が上手なため、難しい問題のはずなのに、不思議なくらい、すーっと頭に入ってきた。これぞプロフェッショナルのプレゼンテーションと感心した。

それに比べて現在は、とシニアらしく嘆いてみよう。ほぼ誰もが PowerPoint を上手に使っているが、あまり個性が感じられない。見た目はきれいだけど、中身がよく伝わってくるかというところでもない。PowerPoint でなく、Keynote や Illustrator や Prezi を使う人からは、何らかのこだわりが伝わってくることもあるが、それでも昔の OHP 時代のような強烈な印象を受けることは少ない。

皆さん、そろそろ PowerPoint を使うのをやめませんか？ と言いつづけて 10 年以上経った。代わりに何をを使うかという、それは自作ソフトである。今やいろいろなフレームワークが充実しているから、情報系の技術者にとって自分専用のプレゼンテーションツールを作るのは、さほど難しいことではない。人工知能の研究者は、プレゼンテーションツールをもっと賢く気持ちの良いものにできるはず。インタラクションの研究者は、もっと良いインタラクションツールとしてのプレゼンテーションツールを作れるはず。データマイニングの研究

者は、マイニングの技術をプレゼンテーションツールに活かせるはず。自分の研究成果が役に立つことを身近なところで実証するのにちょうど良い例題であると思う。何よりも、PowerPoint で特に問題はないと満足しているようでは、情報処理の研究者として研究者マインドが足りないと思いますよ、と檄をとばしておこう。

筆者が使っている自作の「Knowledge Nebula Crystallizer」は、お題を入れると、過去に書きためた研究メモを自動的に再構成して提示してくれるという怪しい汎用のソフトである。いかにも怪しいので学生にも一切手伝わせず、完全に筆者一人だけで作ってきた¹⁾。筆者はこれを日常的に研究のアイデア生成や論文作

応
般

[シニアコラム]

IT 好き放題



[No.51]

PowerPoint を使うのをやめてみませんか？

成やプレゼンテーションに使っている。2次元の概念空間の表示に慣れると1次元のプレゼンテーションに戻る気はしない。その場で電子メールで質問を受けて、書きためたメモの中から答えを自動的に選んで提示するというような機能も持たせている。

筆者のような年寄りでもそれくらいのもものは作れるのだから、中堅若手が本気を出せば、もっと面白くて役に立つものが作れるだろう。プレゼンテーションツールだけでなく、文書作成ソフトやメール処理ソフトなどにも、いくらでも工夫の余地がある。以前にある会でそのような話をしたら、懇親会の席で若い研究者から「PowerPoint 以外でプレゼンしているのですか？ パワポでプレゼンというのは破ってはいけない決まりだと思っていました」という質問を受けた。そんな馬鹿な！技術にとって標準化というのは大事だが、何は標準化が重要で、何は自分たちでどんどん変えるべきなのかを、我々は若者たちにうまく教育できていないのかもしれない。

参考文献

1)堀 浩一：創造活動支援の理論と応用，オーム社(2007)。(2015年1月5日受付)

堀 浩一 Koichi HORI

東京大学

[正会員] hori@computer.org

東京大学大学院工学系研究科教授。1979年東京大学工学部卒業。1984年同大学院博士課程修了。工学博士。創造活動支援システムを中心とした人工知能の研究に従事。2008年～2010年人工知能学会会長。